



2007 山形国際ドキュメンタリー映画祭・アジア千波万波部門「市民賞・奨励賞」W受賞

2008 毎日映画コンクール「ドキュメンタリー映画賞」受賞

2008 ニヨン国際ドキュメンタリー映画祭 招待作品



バックドロップ・クルディスタン

日本 | 2007年 | カラー | DV | 102分 | 日本語 / トルコ語

【監督】野本大

【撮影】野本大 大澤一生 山内大堂

【制作・編集】大澤一生

【音楽】シヴァン・ベルウェル 三浦由有 (エスキモーズ)

【助成】市民社会チャレンジ基金

～明日の市民の力を育てるために、市民がよき社会を目指して
チャレンジするために「バックドロップ・クルディスタン」を応援します～

【製作・配給・宣伝】バックドロップフィルム

ちきしょう、ちきしょう、ちきしょう?!
俺は、日本人は、何をしたらいいんだあ??
何ができるんだあ?? 襟元をわしづかみにされたまま、
ハンマーで殴られてるみたいだ。
心臓がバクバクする。涙がとまらない!

南部虎弾「電撃ネットワーク」

Design
Tshirts
Store
granigh
www.granigh.com

granigh × BACK DROP KURDISTAN

コラボTシャツ! 全国のグラニフショップ(6月下旬～)、
ポレポレ東中野(7月5日～)にて発売! size SS/S/M/L



※デザインは変更の
可能性があります

バックドロップクルディスタン劇場公開記念
[東京クルディスタン]開催!

ドキュメンタリー映画「バックドロップ・クルディスタン」劇場公開を記念して、映像・
ライブを交えたイベントを開催します! 三軒茶屋が一夜限りのクルディスタンと化
す! granighコラボTシャツ先行販売。他詳細はHPにて。

6/27[金] レイン・オン・ザ・ルーフ RAIN ON THE ROOF

20:00 OPEN 23:00 CLOSE ¥1500 (1DRINK)

154-0024 東京都世田谷区三軒茶屋2-14-22 2F

tel&fax 03-3487-8811

hp rain@renovationplanning.co.jp



<http://www.back-drop-kurdistan.com>

2008★7.5 [土]

日本にバックドロップ
ロードショー

※全国順次公開

12:30/14:40/16:50/19:00

ポレポレ東中野

TEL 03 3371 0088
www.mmjp.or.jp/pole2/

山手通り

JR東中野

新橋

BACK DROP KURDISTAN

ナンミンデス。
コシニチワ、

2007 山形国際ドキュメンタリー映画祭で観客支持率ナンバーワン!
2008 毎日映画コンクールでは並居る作品を押しつけて受賞!
話題のドキュメンタリー映画、いよいよ解禁!

日本、トルコ、 ニュージーランド。

クルド難民家族を追って、 一人の若者が国境を越えて疾走する！

“居場所”を求めて日本にやってきたカザンキラン一家。過酷な現実を前にして、
家族はバラバラに引き裂かれる。平和な日本で育った僕は、その一部始終を撮影していた。

★INTRODUCTION

ナンミンなんて知らなかった 2004.3

映像系専門学校に通っていた監督・野本は、ひょんなことからカザンキラン一家と出会う。人間としての彼らに魅力を感じた野本は、企画会議で主人公として彼らを撮ることを企画したが、企画会議で負けた。強制的に落選。そんな折、父アーマットが裁判に負け、強制送還の危険性が高まったため、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）に難民認定と第三国出国をアピールするデモをすることになった。あきらめきれない野本は専門学校を中退し、彼らの行動を撮影し始めた。

ニッポンって一体何なんだ!? 2004.7

酷暑の中、必死にアピールする家族たち。野本は彼らと身近に接しながらその一部始終を撮影した。度重なるUNHCRとの摩擦を経て、「マンドート難民」の認定を勝ち取ったカザンキラン一家だったが、その4ヵ月後、衝撃的な事件が彼らを襲う……。

★What's KURDISTAN?

クルディスタンとは?

クルド人は国家を持たない世界最大の少数民族で、その数は2000万人～3000万人と推定されている。第1次大戦後、敗戦国オスマントルコの分断に当たり、クルド人が「クルディスタン」（クルドの土地、クルドの国の意）と呼ばれる地域はトルコ、シリア、イラン、イラクの国境をまたがって分断された。最大のクルド人口（全国民の20%、推定1200～1500万人）を抱えるトルコでは、建国以来トルコ単一民族主義を提唱してきたため、クルド人という民族の存在を認めない政策を打ち出してきた。近年までクルド語の使用、音楽は禁止され、クルド人は「トルコ人」として生きることを余儀なくされてきた。80年代以降、一時沈静していたクルディスタン独立運動が活性化し、クルド人はトルコ政府から激しく弾圧され、拷問、襲撃、暗殺等により、多くのクルド人が海外で暮らしている。日本でも90年代からクルド難民が入国し始め、現在では埼玉県を中心に約500人のクルド人が日本で暮らしている。しかし、クルド人の難民申請は日本国内では未だに1件も認められていない。

閉塞したニッポン、混迷したセカイをこじあける！ ドキュメンタリー映画の新鋭誕生！

たった一人で撮影し始め、ついに劇場公開を果たす、監督・野本大は弱冠24歳。
時には迷い、悩みながらそれでも突き進む行動力で、ドキュメンタリー映画に新風を巻き起こす！

【監督】野本大

のもと・まさる 1983年6月生まれ、埼玉県羽生市出身。高校卒業後日本映画学校に入学し、ドキュメンタリーの制作を学ぶ。卒業制作にクルド難民の追跡をテーマにした「クルディスタン」を制作。撮影を続けるため同校を中退し、3年の月日をかけて本作を完成させた。



ボクは国境を越えて旅に出る

1年の月日が経ち、野本はそれまでの映像を作品にまとめようと考えていた。しかし、どんなに編集していても、カザンキラン一家を撮影する中で生まれた疑問は一つ解消されない。なぜあの「事件」は起こったのか、彼らはなぜ日本に来なければならなかったのか、そして日本人の僕は「何者」として彼らと向き合えばならないのか？ 疑問は渦巻き撮影は続行。その答えを探しに、野本は彼らの祖国トルコへ旅立った……。

2006.10



MAP

クルディスタン

ドキュメンタリーの原点をこの映画に見た。

“クルド難民”、“強制送還”を捉えながら運動映画にならず、あくまで人間として、そして家族として描いている。家族というその貴重さを改めて感じさせられた。

田原総一郎 [ジャーナリスト]

カザンキランさんの「悪いのは我々ではない日本人でもトルコ人でもない、悪いのは日本のシステム、世界のシステム。」という言葉がよかったです。難民とはなんだろうと考えさせられる映画でした。

ミノワマン [格闘家]

正直「この作品は素晴らしい!!」だなんて言葉、この作品には似合わない。そう思った。そんなモンじゃなかった!! コレはそんな一言じゃ表せない。観ながら「なんで? どうして?」が止まなかった……。そして未だに消化できずに毎日を平和だと思い込みながら暮らしている私がいいます……

香椎由宇 [女優]

この映画を見て今の自分がいかに幸せなのかあらためて感じさせられました。一人でも多くの方々に見てもらい、何かを感じてもらえればと思います。

中山雅史 [サッカー選手/ジュビロ磐田]

この映画はなかなか大切な仕事だと思う。表参道で訴えるクルド人の同情して行動するのは、良心的な日本人なら誰でもするかもしれない。しかし、その後トルコまで行くのが偉い。そうして問題の大きさ、深さに気づく……。そこからが本当の作品になってくる……。

羽仁進 [映画監督]

知ることは大事。なぜなら知らないから人は過ちを犯す。でも知ることは難しい。中途半端に知ることは逆効果の場合もある。何を知ればいいのかに加えて、どこまで知ればいいのかという問題もある。本作にはそのヒントがある。ラストの父親のコメントは胸に沁み入る。

森達也 [映像作家・作家]

具体的な顔をみせないまま人間を排斥する社会。単数系では表すことのできない複雑なアイデンティティ。社会と個人をめぐる力学は、ひとつの視点からは決して語り得ないという当惑に、無理な答えを与えることなく、当惑として映し出したことがこの作品の力強さだとおもいます。

宇波拓 [音楽家]

入管を訪れたクルド人が突然、国連から難民認定を受けていたのにトルコへ強制送還された。その秘密を見せまいとカメラの前に立ちたばかり公務員の無表情の冷たさ。あれは、僕ら日本人の無関心の産物だ。

今一生 [フリーライター]

私たちの社会は少数者を常に排除してきた。だから、私たちの世界観は貧しくてみすばらくなる一方である。このドキュメンタリーはそのような「ニッポン人」の在り方を鋭く問うている。他者を理解し、受容することでこの社会を豊かにしたいと切に願う。

野中章弘 [ジャーナリスト・アジアプレスインターナショナル代表]

クルドから故郷の紛争を避けて来日した難民たちは、逃れてきた日本でも希望を打ち砕かれ、厳しい取り扱いに直面する。難民を受け入れられない日本社会とは何か。その問いかけに答えるべきなのは日本に暮らす自分たち自身だ。

寺中誠 [アムネスティインターナショナル日本・事務局長]

この映画は「難民問題」や「クルド問題」のレポートではない。生まれてはじめて「他者」に正面から見つめられ、たじろぎながらも視線をそらす見返そうとする青年の初心、その心の動きがスクリーンに映っているのだ。

東陽一 [映画監督]

世界への入口が、ここにある。不正義を目の当たりにしたら、すなおに怒ること。疑問が生じたら、その根源に向けて旅立つこと。それがこの社会で窒息せず、世界を獲得する愉快な道であることを、この映画は示している。

吉岡忍 [ノンフィクション作家]

無音のエンドクレジットを眺めながら「アホは国境を越える」というキャッチコピーが付けられたインディペンデント映画を思い出した。が、本作はさらにその先を記録している。脳にドンときた。これバクドロップ。

松江哲明 [映画監督]

バクドロップは、失敗すれば、自らもダメージを受けかねない危うさを持っている。リングサイドの傍観者であることをやめた撮影者は、自ら何度もマットに身を投げ、そのつどダメージを受けながら格闘の旅を続けてゆくが、はたして、この映画を通して、本当にバクドロップを“かけられ”ているのは誰なのだろう?

小田マサノリ [イルコモンズ]

残酷で差別的な日本の入管によって、本国での迫害に加え、強制収容・強制送還という形で二度目の迫害を受ける在日クルド難民。本作は、「共生」「平和」の本質の意味を問う。そして、こうも言う。「ニッポンって一体何やねん?」。冷酷な難民鎖国ニッポンの実態に向き合うこと。「美しい国」の「国際貢献」はそこから始まる。そう、まさにニホンジンの人間性・人間力が問われているのだ。

中川敬 [ソウル・フラワー・ユニオン/ミュージシャン]

一家のクルド人難民がトルコの公共事業の犠牲になる様子にはムカツキを禁じませんでした。国際援助の意味について考えさせる映画です。

ピーター・バラカン [キャスター]

「客観」をかなぐり捨て「僕」が世界の複雑さに立ち向かい、泣き、笑い、食べ、そして悩み続けている。だからこそ信用できるのだ! 私も本気になって友人同士が引き裂かれる理不尽に怒り、涙を流した。

村上賢司 [映画監督・TVディレクター]

わが国はもはや亡命先というよりもむしろ亡命元に似つかわしい!

外山恒一 [革命家・07年東京都知事候補]

これは、あるクルド難民家族についてではあるけれど、同時にこのくについてドキュメントだ。「僕は一番近いところにいた傍観者だった」このことは作家の、そしてこの作品の美質は凝集されている。一番近いところにいる傍観者、それはこの作者、この作品をつぎぬけて、ある種のドキュメンタリーが出発し、またたどりつく地点でもある。

池田香代子 [作家・翻訳家]

これは素晴らしいドキュメンタリーだ。若者らしい正義感と人間的な連帯感、知的探究心、そして行動力で知らない世界の知らない問題に突き進んでゆく、知ろうとする思いのみずみずしさに私は感動した。

佐藤忠男 [映画評論家]

野本よ、「民族問題」という名の迷宮に迷い込んだな。とはいえ、彷徨うにも勇気とエネルギーが必要だ。だが出口は、まだまだ先だ。困難は続くだろうが、頑張れよ。野本の困難さは、世界の困難さと同質のものだから。

原一男 [映画監督]

ニュースや新聞で知ることなんて、ホント、事件や人物のほんの一部分だけなんだよなあ。冷たい海水下に深く潜って、氷山の全貌を見ようとした監督の行動力、勇気。すごい若者が日本にもいるぞ!

幸村誠 [漫画家]